

大転換

The World Economy : History and Prospect

の時代

世界経済21世紀への展望 **上**

W.W.ロストウ著

坂本二郎・内藤能房・足立文彦訳

第1部:人口転換
第2部:18世紀以降の成長
第3部:趨勢期間
第4部:景気循環
第5部:経済成長の諸段階
第6部:世界経済の将来

その全貌

20世紀

ダイヤモンド社

大転換

The World Economy: History and Prospect

の時代

世界経済21世紀への展望

上

W.W.ロストウ著

坂本二郎・内藤能房・足立文彦訳

ダイヤモンド社

訳者略歴

さか もと じ ろう
坂 本 二 郎

1928年大阪生れ。1950年、東京商科大学卒業。55年、同大学院修了。同年、一橋大学経済学部講師、62年、助教授となり、70年に退官。その後、経済開発の研究に専念。著書に『知識産業革命』（ダイヤモンド社）のほか多数あり、訳書にはC. P. キンドルバーガー『経済発展論』（共訳、好学社）、W. W. ロストウ『二十一世紀への出発』（共訳、ダイヤモンド社）がある。現在、「世界経済の中の日本経済」をテーマに研究・執筆活動を行なっている。

現住所：東京都港区芝浦 4-4-27, A-307

ない とう よし ふさ
内 藤 能 房

1942年東京生れ。1967年、東京外国語大学卒業。海外経済協力基金調査部を経て、75年に一橋大学大学院経済学研究科博士課程修了、同大学経済学部助手となる。77年、名古屋市立大学経済学部講師、78年、助教授となり、現在に至る（経済発展論担当）。

現住所：名古屋市天白区表台 105-2

あ だち ふみ ひこ
足 立 文 彦

1946年三重県生れ。1968～69年、サンケイ・スカラシップ留学生として、アメリカのブランドアイズ大学に学ぶ。1971年、一橋大学経済学部卒業。76年、同大学院経済学研究科博士課程修了。81年、南山大学経済学部助教授（経済発展論担当）。1982～83年、タイ国タマサート大学客員教授に招かれ、経済発展論の講義のほか、日本経済論の特別講座も担当。訳書にW. W. ロストウ『二十一世紀への出発』（共訳、ダイヤモンド社）がある。

現住所：名古屋市昭和区山里町91

大転換の時代(上)——世界経済21世紀への展望——

昭和 57 年 12 月 23 日 初版発行

定価 2900円

著 者	W. W. ロ ス ト ウ
	坂 本 二 郎
訳 者	内 藤 能 房
	足 立 文 彦

©1982 Sakamoto, Naito & Adachi

発行所 ダイヤモンド社

郵便番号 100
東京都千代田区霞が関 1-4-2
編集 電話 東京 (504) 6403
販売 電話 東京 (504) 6517
振替口座 東京 9-25976

落丁・乱丁本はお取替えいたします

加藤文明社印刷・高陽堂製本
1033-230250-4405

訳者はしがき

著者W・W・ロストウの略歴については、『二十一世紀への出発——ケインズ経済学を超えて』（ロストウ著、坂本二郎・足立文彦訳、一九八〇年一月、ダイヤモンド社）の解説で詳しく述べたので、ここでは繰り返さない。

ロストウは、若いころからイギリス経済史に関する書物も書き、経済発展の理論的基礎となる書物や経済発展の「諸段階」論を書いて世に問い、アメリカ内外で大きな反響を呼んだ。その後、ハワイトハウスに請われて政治に従事したあと、学界に戻って、四三年間にわたる研究を集大成しようと思いい、次の三部作を書いた。

第一は『How It All Began, 1975』（『すべてはどのように始まったか』）

第二は『The World Economy: History and Prospect, 1978』（そのまま日本語に直せば『世界経済——歴史と展望』）

第三は『Getting From Here to There, 1978』（坂本二郎・足立文彦訳『二十一世紀への出発』）である。

本書は、この第二の『世界経済——歴史と展望』の翻訳である。日本語版では題名を『大転換の時代——世界経済二十一世紀への展望』とした。

本書の特徴は、歴史と理論と統計と政策という四つの分野を渾然一体として世界経済の通史を論じ

ていることであろう。歴史と理論と統計の三位一体という点では、ジョセフ・A・シュムペーターの資本主義過程の理論的・歴史的・統計的分析『景気循環』の後をつぐものといえよう。世界経済や国際経済の今日的テキストとしては、最適の書物と思う。

構成からみれば、まず全体を六部に分かち、第1部から第5部までを歴史家、統計家、理論家ロストウが論じ、第6部を政策家ロストウが論ずる仕組みである。

第1部人口転換、第2部一八世紀以降の成長、第3部趨勢期間、第4部景気循環、第5部経済成長の諸段階（二〇世紀）、第6部世界経済の将来。

歴史家は多い。しかし一八世紀から二〇世紀までの近代化、工業化の長期的歴史を、一人で論ずる学者は少ない。また各国をテーマとする歴史家も多い。しかし、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、スウェーデン、日本、ロシアソ連、イタリア、カナダ、オーストラリア、アルゼンチン、トルコ、ブラジル、メキシコ、イラン、インド、中国、台湾、タイ、韓国と二〇カ国までを一人で論ずる学者は少ない。さらに、一つの分野でロストウよりすぐれた学者はいるであろう。しかし、この四つの分野をすべてマスターして総合的な大著を書いたところが、ロストウの偉大なところといえる。ロストウがこのような長期と世界中の多くの国を論ずることができるのは、理論的基礎があるからである。歴史は個性的であるという人もいる。しかし、歴史には進化があるとみる人もいる。その進化を理論的にしたものが、経済発展段階論である。ロストウには、独特の経済発展段階論があった。それは、比較的若いころに構想ができていた。

それは、次の二つの書物で示されている。『*The Process of Economic Growth*, 1953（酒井正三郎他訳『経済成長の過程』東洋経済新報社）』、『*The Stages of Economic Growth*, 1960（木村健康他訳『経済成長の諸段階——一つの非共産党宣言』増補版、ダイヤモンド社）』。

ロストウの経済発展段階論は、伝統的社会、先行条件期、離陸期、成熟への前進期、高度大衆消費期、次の段階という六段階を図式化したものであった。『経済成長の諸段階』では、一九六〇年までの近代化した国々を取り扱っていたが、本書『世界経済』では、一九七〇年代後半までの近代化した国々を取り扱って、範囲も拡大されている。

もう一つの論点は、コンドラチェフの波の再検討である。一八世紀から二〇世紀までという長期を扱うと、どうしても長期の景気循環の波を取り上げざるをえない。コンドラチェフの波動説は種々な要素をもつが、ロストウは相対価格の変動を中心に取り上げており、とくに、一九五一年から七二年までを、コンドラチェフの波の下降期で世界経済の繁栄期とみ、一九七二年以降をコンドラチェフの波の第五次上昇期とみるのが、ロストウの議論の特徴である。

一九七三年には石油価格の高騰があり、金の価格も原材料の価格も上がったが、このような食糧、石油、原材料という基礎的商品の値上がりを相対価格の変動としてみるわけである。

このような理論で現在をみれば、当然、ケインズ理論に批判的になる。需要側より供給側を重視し、基礎的商品の供給増には市場経済よりも公共経済を重視し、もっと長期的にみた投資のパターンの変更が重要となる。とくに、食糧、石油、原材料の供給増のための投資が必要であり、とくに成熟社会では、一つのことを決めても実現するまでにタイムラグがあるので、長期をみることはいっそう重要となる。

将来についての最も基本的な問題は、展望において、悲観論と楽観論の対立があることである。

悲観論の代表はローマ・クラブの見解であり、それは『成長の限界』（デニス・メドウズ他著、大来佐武郎監訳、一九七二年、ダイヤモンド社）に示されている。またアウレリオ・ペッチェイ著『ローマ・クラブ会長の省察——未来のための一〇〇ページ』（大来佐武郎監訳、読売新聞外報部訳、一九八一年、読売

新聞社も同様である。最近では、アメリカ合衆国政府特別調査報告書の見解、すなわち『西暦二〇〇〇年の地球』（逸見謙三・立花一雄監訳、一九八一年、家の光協会）もある。

ローマ・クラブの見解によれば、「世界人口、工業化、汚染、食糧生産、資源の使用の、現在の成長率が不変のまま続くならば、来るべき一〇〇年以内に、地球上の成長は限界点に到達するであろう。もっとも起こる見込みの強い結末は、人口と工業力のかかなり突然の、制御不可能な減少であろう」（邦訳、序論二ページ）という。

一方、楽観論の代表は、ハーマン・カーンである。ハーマン・カーンは、『紀元二〇〇〇年——三三年後の世界』（A・ウィナーとの共著、土屋清校閲、一九六八年、時事通信社）、『超大国日本の挑戦』（坂本二郎・風間禎三郎共訳、一九七〇年、ダイヤモンド社）、『未来への確信——成長限界論を超えて』（小松達也・小沼敏共訳、一九七五年、サイマル出版）、さらに最近では『大転換期』（風間禎三郎訳、一九八〇年、TBSブリタニカ）、『ブームが来る』（長谷川慶太郎訳、一九八二年、講談社）を書いて、悲観論に反撃している。

すべての論者を、悲観論か楽観論かに分けるやり方も乱暴であるが、ロストウは、「悲観論と楽観論のどちらが正しいかが問題ではない。現状からあるべき姿に移行するにはどうしたらよいかが真に重要な問題である」といって、慎重で、政策的な、楽観論の立場をとっている。

将来に対するロストウの政策を述べている第6部「世界経済の将来」の初めの章「成長に限界はあるか」で、ロストウは『成長の限界』には、真の問題点を劇的に描写して人々の関心を高めたという長所があり、さらに、知識人や研究者や官僚がスペシャリストとして養成される状況の下で、人口、食糧、エネルギー、原材料および汚染の相互関係を強調したことは非常に有益だと思う」と評価しながら、同書には「五つの大きな弱点がある」という。

第一に、計算が世界を一つとして行なわれている。世界経済を構成するのは、国民経済および密接

に結びついた地域経済である。第二に、システム・モデルは事実による裏付けが非常に弱い。汚染はとくにそうである。第三に、技術および資源制約の扱い方が誤解を招きやすい。第四に、このモデルには、希少財消費の節約、代替財の開発等に対する刺激誘因を高める価格機構が欠如している。第五に、この平等主義的な処方箋が政治的、社会的、心理的に実行可能であるという保証はどこにもない。また、私が付け加えれば、第六に、「現在の成長率がそのまま五〇—一〇〇年も続けば」という仮定は、現代の激動の状況下では非現実的である。

要するに、このモデルは、「収穫逦減のために絶対量が限られるか、あるいは算術級数的にしか増加しない供給に対して、需要は幾何級数的に増大する」という矛盾や不安であるが、それはなら新しいことではない。このような議論には、これまでに四つの先例があると、ロストウは指摘する。第一はマルサス、第二はジェヴォンズ、第三はケインズ、第四はペイリーのときであった。いずれも、工業品価格に対する食糧、原材料の価格の上昇があったときであった。

結局、ロストウは来るべき四半世紀が最も重要な時期になると信じている。後は、本書自らが語るであろう。

本書は、初め中山伊知郎博士が坂本に訳してみないかとすすめられ、坂本は足立君と相談し、やがて内藤君も加わって、三人で共訳することになった。

しかしなにぶんにも大著であるので、広く経済政策に関心を持つ人々にとってテキストとして最適とは思ったものの、ページ数と価格に制約される点もあって、ダイヤモンド社の嶋矢氏と訳者三人で合議のうえ、残念ながら、全体で二割ないし、部によっては三割を削らざるをえなかった。第3部は抄訳とし、第5部では二〇カ国のうち七カ国を省略した。それによって、全体の議論が歪むことのないように十分配慮した。

三人の役割は、

日本語版への序言、序文、序説 内藤

人口転換 同

一八世紀以降の成長——その全貌 同

趨勢期間 足立

景気循環 同

経済成長の諸段階——二〇世紀 内藤

世界経済の将来 足立

内藤と足立の両君はお互いに訳稿をチェックし合い、坂本がそれを見、校閲し調整するという役割であった。もし誤りがあれば、それは三人の訳者の共同の責任である。ご親切な読者の叱正を待ちたい。

いまは亡き中山伊知郎博士のご霊前に本書を献げたい。

また、ダイヤモンド社の嶋矢昌三氏には、温かく親切なお心づかいをいただいた。記して感謝したい。

昭和五十七年十一月

坂本二郎

日本語版への序言

私は、この本が日本語になって利用される運びとなったことを喜んでおります。著者にとりまして、本書は私の四十数年におよぶ研究の集大成であり、また若いころから手掛けてきた仕事の成果でもあります。これはまた学者間にみられる、各国経済史を超えて全体としてのあるいはその主要地域を中心とする世界経済の進展になんらかの秩序づけをしようとするより広範な知的衝動を反映したものであります。より大規模な総合化をめざして努力してきた人々のなかには、ポール・ベイロック、フェルナンド・ブローデル、カルロ・チッポラ、W・アーサー・ルイス、ダグラス・C・ノース、そしてイマニエル・ウォラースタインがいます。『ケンブリッジのヨーロッパ経済史』(*The Cambridge Economic History of Europe*)の第七巻もまた本書と関係を有しているでしょう。世界経済全体としての展開をつかもうとするこのような傾向は、以下の三つの要因から説明できます。

第一に、ある国の経済の歩みを外部環境を無視して理解することは困難もしくは不可能であるということが常であったからです。あらゆる場合において、各国の成長は国内固有の諸力間の相互作用の結果でありましたが、その固有の諸力は国外で生じた経済的およびしばしば経済外的諸要因と相互作用していたのです。私が本書の序文の最初のパラグラフで記しているように、自己の研究ならびに教育の中心をもう何年も前にイギリス経済から世界経済に移したのも、この事実に気づいたからでした。

第二に、持続的経済成長ならびに工業化は事実上あらゆる主要な文化によって吸収可能な過程である、ということが徐々に明らかとなりました。成長についての何人かの真面目な研究者が、急速な経済成長はヨーロッパおよびヨーロッパと文化的につながっている社会の特産物であるという原則に対して日本は唯一の重要な例外である、と信じた時期がそれほど以前ではなくありました。世界には、持続的経済成長をまだ得られず、依然として大規模な貧困が続いている国が多くあります。しかしながら、持続的経済成長は可能であることがすべての大陸で証明されました。このことがわかって、経済成長の分析者は、一般的な成長理論を探索したり、典型的な成長のパターンを統計的に測り出そうとすることを求められたのでした。

第三に、われわれはいまやきわめて相互依存的で、互いに非常に敏感に作用しあう世界経済のなかで暮らしているので、過去数世紀の歩みをこうした国際的連関のなかで振り返り、物語ることが当然であるということです。国家の枠を超えた経済の歴史を大規模に扱うには、なんらかの理論的枠組を採用することが要求されます。このような枠組なしには、入手可能な大量の事実資料を選択し、それになんらかの秩序を与えることはできません。本研究において私が利用している理論的枠組は序説のところで簡単に略述されていますし、私の今までの著作、とりわけ『経済成長の過程』(The Process of Economic Growth)と『経済成長の諸段階』(The Stages of Economic Growth)に入念に述べられています。私は、単一のいかなる理論的アプローチも、なんらかの絶対的な意味において正しいとは言えないことを強調したいのです。各アプローチは歴史の歩みの一部分に照明を当てますが、その他の面を無視するものです。ここでの私の目的は、過去二世紀の間の世界経済の展開を報告することにある、これは、本書が印刷に付された一九七七年六月時点において、われわれはどの地点にいるのか、またわれわれは二、三〇年先に何に直面することになるのか、さらにその二、三〇年を成功裡に通過するため

に公的政策においてどのような新しい方途が必要とされるか、を説明するのに役立つでしょう。

私は、本書の第6部の政策分析や処方箋だけでは満足できず、第6部の展望部分をさらに入念に展開しました。この政策に関する著書は一九八〇年に日本でも出版されました。すなわち『二十一世紀への出発——ケインズ経済学を超えて』(*Getting from Here to There: A Policy for the Post-Keynesian Age*, 坂本二郎・足立文彦共訳、ダイヤモンド社がこれです。私は、第6部の議論の基本的な正しさを、四年前より以上に確信していることだけは言えます。われわれは、われわれすべてにとって重要な問題——エネルギーと農業の問題、原材料の問題、環境保護のそれ、そしてこれらの諸問題をわれわれがかなりよく処理することを可能にする技術の創造と伝播の問題——が供給サイドに存在しているという時代に直面しており、それは長引きそうであります。この諸事項に対処する行動こそ、急速な成長の再開と世界経済の構造的歪みを是正する基礎とならなければなりません。このような政策は、主要国経済によっても、あるいは世界経済全体としてもまだ考案されてはおりません。そのような結果が、慢性的で徐々に蝕まれていくようなスタグフレーションであります。

本書のなかで具体的に示されている経済理論および経済史についての叙述を進めて行くうちに、私自身の頭の中にある展望が与えられ、近代経済学の状況について二つの際立った結論が浮かんできます。その一つは、一九五〇年代ならびに六〇年代を通して、その考え方と政策を支配したスマートな新古典派総合がはなはだ不十分なものであるということです。われわれは、現在受け入れられている経済理論の主要部分を、生存可能でまだ成長しつつある世界経済を支えるのに必要とされる新技術の創造と基本物資の供給ならびにその維持を内生的に包含できるように修正しなければなりません。その第二は、公的政策にかかわるいかなる大経済問題——たとえば、インフレの管理、生産性問題、そして経済成長それ自身——も、経済的観点だけからでは十分満足がいくようには理解できないという

ことです。むずかしいことではありますが、われわれは経済的、社会的、政治的、そして文化的分析を織り合わせることを学ばなければならないでしょう。アダム・スミスは、二〇〇年以上も前に、経済学をそのような広い道に乗り出させました。経済学者が人類社会に本当に役立ちたいのであれば、われわれはその道に戻らねばならないでしょう。

序 文

私は、一九三〇年代に、一九世紀のイギリス経済を研究することによって経済史家として出発した。しばらくして、イギリスの発展は拡大する世界経済の進展の一部として見ないかぎり十分には理解できないということがわかってきた。そこで私は、経済史というものを、世界経済の中に生み出される拡散的な諸力と各国の成長の歴史との間の相互作用として研究し、教えようと決心した。そして私は、ほぼ二〇年間、私の大学院生とともに、世界経済の歴史を勉強し吸収してきた。一九七二年になって、いまやこの知見を書物として著わすべきときだと決意し、しかもそれを、世界経済上の現在ならびに将来の諸問題を明らかにするのに役立つような形で行なおうと考えた。この集約的な仕事の第一番目のものが、『すべてはどのように始まったか』(*How It All Began*)であり、これは当初、本書の第一章として計画していたものであったが、その主題はそれ自身固有の生命を持ち、独立した一書として出版されることとなった。

本書は、歴史に関する試論であると同時に、伝統的な新古典派や新ケインズ派の経済理論に対する挑戦の書でもある。それらのすべての長所を認めるとしても、それにもかかわらず、双方とも、ダイナミックな過去の経済史あるいはまた世界経済が現在直面している経済問題の特質を理解するために十分な枠組を提供しているとはいえない。後者の問題を扱っている第6部は現下の要請になかった小論文ふうのものとなっている。この点において、本書は、従来の新古典派以後の理論に対する挑戦と

いう面と同時に、経済史家の間の旧来の伝統、つまりアダム・スミスと、スミスの政策的提言のいくつかに異論を唱えたドイツ歴史学派の双方が扱った主題にまでさかのぼる伝統に属するものである。

私は、本書の全貌が明確になったときに、現行政策への適用例が私が当初考えていたより数多くあるということに気がついた。しかしながら、これらの適用例を第6部に全部含めるということになる、本書の内容のバランスを崩してしまふ。そこで私は、完全に政策的事項にあてられた別個の一卷を書くことにした。したがって、第6部は、詳細な処方箋を提示するというよりはむしろ、政策化のための的確な枠組を規定しようとするものである。

私はここで、専門家ではないが本書の主題に興味のある読者や、私が過去数年間にわたって実際に本書の内容の多くの部分を教えた専門課程の学部学生が理解できる程度の記述をめざした。経済史家や経済成長の分析者の間で論争のある専門的な事項は、主として注の部分に入れてある。多くの表や図がその有用さがわかる人々のために挿入してあるが、そこから引き出せる主要な結論は本文の中に述べられてある。

本研究に必要なデータのギャップを埋めるのに、以下の多くの人々にお世話になった。モーゼス・アブラモヴィッツ、ステファン・パール、トーマス・ベリー、T・G・ベイノン、H・J・ビッケル、ウィリアム・ブレイステッド、ホリス・チェネリー、ハワード・コッター、L・J・ディーマン、アレキサンダー・エクスタイン、O・J・ファイアストーン、エドワード・フリード、ロバート・ゴールマン、ウィリアム・グレード、S・A・ゴールドバーグ、カーミット・ゴードン、ドリリン・ゴイヤー、ジェイムス・グラント、ウォルター・ヘラー、ハンス・ハイマン、ジョーン・ホルスン、フランセス・ジェイムス、トマソン・ジャナジー、ヘルマン・カーン、C・P・キンドルバーガー、フィリップ・クライン、サイモン・クズネッツ、ワシリー・レオンティエフ、W・A・ルイス、V・P・

ロミキン、ロバート・マクファイターズ、ウィルフレッド・マレンバウム、エドウィン・マーティン、アイルズ・ミンツ、B・K・ネルー、ダグラス・ノース、H・D・ポター、スタンリー・ルー、ポール・ローゼンスタイン・ロダダン、ヘンリー・ロソフスキー、アンナ・シュウォルツ、ギャーリー・ウォルトン、アンソニー・ウィーナー、チャールズ・ラケット、ならびにワシントン駐在のオーストラリア、イギリス、インド、そしてトルコの各大使館とパリのOECDの経済担当官の各氏である。

とりわけ、未公開のアメリカの国民所得計算を利用させてくださったベリー教授と三二カ国の未刊行の国民所得ワークシートの利用をお許しくださったクズネット教授に対しては、深く感謝申し上げます。

さらに私は、草稿を読み、本文の一部分を批評してくれた以下の各氏に対しても謝意を表したい。ホセイン・アスカリ、ハレーイ・ブラウニング、ポール・イングリッシュ、ハフェズ・ファルマヤン、O・J・ファイアストーン、リンカン・ゴードン、リチャード・グレナム、チャールズ・ヒッチ、デイヴィッド・ケンドリック、ロバート・マクギニス、ロバート・マクナマラ、エルスペース・ロストウ、J・H・ウォレン、ならびにシドニー・ウェイントラウブである。ゴードン教授とロストウ教授の第6部についての詳細な批評は非常に有益であった。

パメラ・グリシャム、ヴァージニア・フェイ、ならびにロイス・ナイヴンスは手書きの各種草稿を快くタイプしてくれた。加えてナイヴンス嬢はいつものように献身的な編集者であった。テキサス大学のキャロライン・C・ウィリーは印刷向けの最終原稿を細心の注意を払って作成してくれた。

全国人文科学基金は、第5部に要約されている各国経済史の基礎となるデータの収集に財政的援助を与えてくださった。私は、『経済成長の過程』(*The Process of Economic Growth*) (付録I) の場合も、各国経済に関する集計的ならびに部門別データを集め、図化することを試みた。その方法を拡張して

いくなかで、本研究においては、一九七五年以来私の研究助手であるスチュアート・グリーンフィールド君がデータを計算機に入れることを示唆してくれた。全国人文科学基金も、その補助金の一部をこの目的に使うことに同意された。ジェイムス・ピーチは柔軟な計算機用プログラムをつくってくれた。ジョセフ・プルータ、テリー・ヘンプは、スチュアート・グリーンフィールドと同様に、何回となくデータ収集を手伝ってくれた。フレデリック・フォアダイスとファイサル・ナスルはデータを原典に照らしてチェックし、付録Dに整理統合してくれた。ジェラルド・フェイは第5部のコンピュータ化された図を本書の形に縮小する方法と形式を考案してくれた。ステファン・チェイスは、テキサス大学（オースチン校）の視覚教育部と協力して、上記の仕事を完成すると同時に、本書中の多数の図を作成してくれた。同大学の経営研究部も本書の他の部分で使用されている図の複製に助力された。

第5部で図化されたデータの出典は付録Dに示されている。データならびに計算機プログラムで可能となった操作に関する情報は、テキサス大学（オースチン校）経済学部のマルホール・プロジェクトから入手可能である。私および幾人かの同僚は、目下、当初の歴史的データ・ベースを対象国数ならびに含まれる時系列統計の範囲の両方について拡大し、またそれに関心を有するすべての人々とそれを分かち合いたいと努めている。

本研究の完全な出版化は、シド・W・リチャードスン財団からテキサス大学出版局への補助金によって可能となった。したがって、私は、リチャードスン財団の寛大さと同出版局の同僚諸氏の情熱ならびに専門的熟練のお陰とお礼を申し上げなければならぬ。

一九七七年六月

テキサス州オースチンにて

W・W・ロストウ